第三十四講　救の完成（一）　第八章の全體の大意　（十二月十七日）

羅馬書は十六章より成るが故に、分量的に見るも第八章は其中心である、之を一つの山に譬へれば第八章は實に登りつめた所、卽ち絶頂である、そして九章よりは下りとなるのである、羅馬書は新約聖書の中心であり、その第八章は羅馬書の中心である、故に羅馬書第八章は新約聖書の中心である、かの獨逸敬虔派の創始者スピーネルの言として傳へらるゝ所によれば、「もし聖書を指輪に比するならば羅馬書は其寶石であり、第八章はその寶石の輝點（sparkling point)である」との事である、實にこれ聖書の最高點である、近く天を摩（ま）せんとする所の絶巓（ぜつてん）である。

今八章の第一節を見るに「この故にイエスキリストに在るものは罪せらるゝ事なし」とある、そして八章の最終句は、「そは或は死或は生、或は天使或は執政（つかさ）……他のまた受造物（つくられしもの）は我らを我主イエスキリストによる神の愛より絶（はな）らすること能はざる者なるを我は信ぜり」とある、罪せらるゝ事なしは慥に大なる恩惠である、しかし之は恩惠の消極的方面であつて、たゞ罪せられないと云ふだけである、然るに八章の終尾は何者を以てするも、何事を以てするもキリストの愛（キリストが我等を愛する愛）より我等を離らし得ないと云ふのであつて、明らかに恩惠の積極的方面を說いた者である、恩惠は先づ消極を以て始まり遂に積極の絶頂に及ぶものである、これを記せしが第八章である、最初の句が恩惠、最後の句が恩惠であるが故に、その間に挿（はさ）まる各節が悉く恩惠を記せしものである、羅馬書八章は實に「恩惠記」である。

次に八章全體を見るに其處に自(おのづ)から論述の順序といふ者がある故、これを數段に分かちて見ることは解釋上に益する所多いのである、そして註解學者は何れも最上の分析をなさんと競ふため、今日まで幾つかの分ち方が發表せられたのである、今一々これを紹介するは益なき事である故、こゝには羅馬書註解の最高權威の一人たるゴッデーのそれを用ふる事にする、ゴッデーは左の如く五つに分けたのである。

(第一段)一節―四節、罪より免かるゝ事。

(第二段)五節―十一節、罪と其結果たる死とより免かるゝ事。

(第三段)十二節―十七節、神の子とせらるゝ事。

(第四段)十八節―三十節、世嗣(よつぎ)とせらるゝ事。

(第五段)三十一節―三十九節、大讃美。

但し精しく云へばゴッデーは一節より十一節までを第一段と見てそれを又二つに分けたのであつて、從つて全體を四段に分けて居るが、茲には便宜上彼の心を採つて全體を五つに分ける事にしたのである。

第一段はその第一節に於て「イエスキリストにある者は罪せらるゝ事なし」と斷定し、その根據として二、三、四節を記してゐる、「活かす靈の法(のり)」を以て律法に代るべきものと見て、聖靈の働きに重きを置いたのが其特徴である。

第二段は罪の結果たる死より免かれて永遠の生命を與へらるゝ幸福を說く、これ亦聖靈に依るのである、「もしイエスを死より甦へらしゝ者の靈汝等に住まば、キリストを死より甦らしゝ者は其汝等に住む所の靈をもて汝等

が死ぬべき身體をも生かすべし」と十一節にある通りである。

第三段は聖靈に依て神の子とせらるゝことを主眼とする、「凡そ神の靈に導かるゝものは是れ卽ち神の子なり」と十四節にあり、「聖靈みづから我等の靈と共に我等が神の子たるを證す」と十六節にある、人類は悉く神の子であるとは能く聞く所のことである、併し乍らパウロに依れば、或特別の狀態にある者のみが神の子である、それは人類の全部ではなくして其幾部分である、卽ちキリストを信じて罪と死とより免かるゝ特別の恩惠に接せし者のみが神の子である、この恩惠と幸福とに接しないものは、それが如何なる聖者哲人であつても決して神の子ではない、それはたゞの人の子——人間である、神の子とは普通の人より一轉して全く別な或る他の者と成つた者を云ふのである。

第四段は世嗣たる事を說く、「我等もし子たらば又世嗣たらん」と十七節に言ふ、神の子たる者は又世嗣たるに至るといふのである、たゞ神の子たる名稱と資格を得たと云ふのみに止まらない、或る實物を賦與せらるゝと云ふのである、神の子とせられし者は神の子として止まる以上は必ず或る實物を神より與へらるゝのである、卽ち「神の世嗣にしてキリストと共に世嗣たる者」である、然らば何を父より讓り與へらるゝのであるか、答へて言ふ、改造せられたる宇宙——全世界萬物——を與へらるゝのであると、別の語を以て云へば全宇宙と共に救はれて其宇宙の主人公となるのである、實に壯大なる希望ではないか、これ實に神の子たる者がキリストと共に世嗣となりて受けんとするものである、茲に至つてパウロの信仰、思想、希望は絶頂に達したのである、基督者は復活して榮光を纏ひて改造完成せられたる全宇宙の主人公となると云ふ、これが基督者を待つ所の最大の榮譽また救

の完成である、あゝ偉大なる思想よ、人類の抱き得る思想にして之以上に出づることは到底出來ないのである。

茲に至つて第五段の壯麗なる讃美の歌は自からパウロの唇をついて流れ出たのである、流れ出ざるを得なかつたのである、之は決して作つた詩ではない、大希望大感謝の溢れ漲れる心より自然と流れくだりし大歡喜の滴れである。

以上が第八章の大意であるが茲に尚ほ注意すべき一つの事がある、それは七章以前の全部と第八章との相違點である、七章までに於ても勿論救ひは說かれて居るが、之を八章のそれと比較するに大體に於て外部的であると云はねばならぬ、勿論救ひのことであるから之を靈魂に受くる點より云へば内部的であるが、しかし八章のより内部的なるに比すればより外部的であると見ねばならぬ、即ち七章までに於て說かるゝ救は重に人の外に在る事を信ずるのである、即ち十字架に於けるイエスの贖ひを信ずるのである、又イエスを仰ぎ瞻てそれを型として潔めらるゝのである、その他何れの點より見るも信者の外に於て在る事を信受すると云ふのである、之にて救は全うせらるゝであろうか、否、更により内部的なる一事が必要である、神御自身が聖靈として我等の衷に下りて、我等の靈と合體し、以て我等を助け我等の救を完成し給ふ事、この事が是非ともなければならない、これ内部よりの救であつて、實に第八章の主題である、神は内外より我等を救ひ給ふのである、外に神の御業を示して我等を救ふこと——之れ第七章までの主題である、内に聖靈を働かしめて我等の救を完成すること——之第八章の主題である。

パウロは加拉太書三章一節に於て「愚なるかな既にイエスキリストの十字架に釘けられたる事を明かに其目の

前に現はされたるガラテヤ人よ、誰が汝等を誑(たぶら)かしゝや」と云ふた、十字架のイエスを明かに目の前に現はさるゝ事、此事に依て人は自己の罪の赦免を悟りて魂の平安を得るのである、義ならざるに義とせらるゝ事を學びて歡喜の人となるのである、又彼は哥林多後書三章十八節に於て「すべて我等帕子(かほおほひ)なくして鏡に照(うつ)すが如く主の榮を見、榮に榮いや增(まさ)りて其おなじ形に化(かは)るなり、これ主卽ち靈(みたま)に由りてなり」と言ふた、之は己の外に在る主の榮を常に仰ぎ瞻る事に依て己も亦それに似ると云ふのである、義とせらるゝと云ふ事、潔めらるゝと云ふ事、これは共に重要なることであるが自己以外の或者、或事がその主要素となつて居るのである、故に比較的に云へば外部的である、之が羅馬に於て七章迄に說かれたことである。

かく始まりし救は内部的に完成せられねばならぬ、聖靈が内より信者を化さねばならぬ、これ八章の特に教ふる所である、その十六節に「聖靈みづから我等の靈と共に我等が神の子たるを證(あかし)す」と云ひ、又二十六節に「聖靈も亦われらの荏弱(よはき)きを助く、我等は祈るべき所を知らざれども聖靈みづから言ひ難きの慨歎(なげき)を以て我等のために祈りぬ」とある如き共に此章の特色を示す言葉である、聖靈が信者の心を占領して内部より彼を動かし、勵まし、教へ、力附け、以て外よりの關係を内的に完成、成就すると云ふのである。

なほ他の語を以て云へば、七章までは神と人の關係を說き八章は神と人の合一を說いたものである、關係は關係だけに止まつては未完成である、この關係の發展するところ遂に合一、一致、融合にまで至らねばならぬ、そして此の合一は實に靈と靈の合一を以て起らねばならぬ、先づ靈と靈が合一すれば相互の最も深き所に於て合一したのである故、その他の合一も當然實現さるゝのである、そして神の靈はキリストの靈である、又聖靈である、

この聖靈が信者の心に臨んでその靈と一致融合する時謂ゆる神人合一は實現せらるゝのである、之を說きしものが第八章である。

第三十四講　救の完成（一）　第八章の全體の大意　現代語訳

羅馬書は全十六章からなるため、分量から見ても第八章はその中心である。これを一つの山に例えるなら、第八章はまさに登りつめた場所、すなわち絶頂である。そして第九章からは下りとなる。羅馬書は新約聖書の中心であり、その第八章は羅馬書の中心である。ゆえに羅馬書第八章は新約聖書の中心である。かのドイツ敬虔派の創始者スペナー（フィリップ・ヤコブ・シュペナー）の言葉として伝えられるところによれば、「もし聖書を指輪に例えるなら羅馬書はその宝石であり、第八章はその宝石の輝点（スパークリング・ポイント）である」とのことである。まさにこれは聖書の最高点である。近く天を摩しようとする絶頂である。

今、八章の第一節を見ると、「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」とある。そして八章の最終句は、「死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、……そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」とある。罪に定められることがないのは確かに大きな恵みである。しかしこれは恵みの消極的側面であって、ただ罪に定められないというだけである。しかるに八章の終わりは何ものをもってしても、何事をもってしてもキリストの愛（キリストが私たちを愛する愛）から私たちを引き離すことはできないというものであって、明らかに恵みの積極的側面を説いたものである。恵みはまず消極をもって始まり、ついに積極の絶頂に及ぶものである。これを記したのが第八章である。最初の句が恵み、最後の句が恵みであるがゆえに、その間に挟まる各節がことご

とく恵みを記したものである。羅馬書八章はまさに「恵みの記」である。

次に八章全体を見ると、そこに自然と論述の順序というものがあるため、これを数段に分けて見ることは解釈上に益することが多い。そして注解学者は何れも最上の分析をなそうと競うため、今日までいくつかの分け方が発表された。今いちいちこれを紹介するのは益がないため、ここでは羅馬書注解の最高権威の一人であるゴッデー(フレデリック・ルイ・ゴドー)のものを用いることにする。ゴッデーは次のように五つに分けた。

(第一段)　一節―四節、罪より免れること。

(第二段)　五節―十一節、罪とその結果である死とより免れること。

(第三段)　十二節―十七節、神の子とされること。

(第四段)　十八節―三十節、跡継ぎとされること。

(第五段)　三十一節―三十九節、大賛美。

ただし詳しく言えばゴッデーは一節より十一節までを第一段と見てそれをまた二つに分けたのであって、したがって全体を四段に分けているが、ここでは便宜上彼の意を汲んで全体を五つに分けることにした。

第一段はその第一節において「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」と断定し、その根拠として二、三、四節を記している。「いのちの御霊の原理」をもって律法に代わるべきものと見て、聖霊の働きに重きを置いたのがその特徴である。

第二段は罪の結果である死より免れて永遠の生命を与えられる幸福を説く。これもまた聖霊によるのである。

「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてくださいます」と十一節にあるとおりである。

第三段は聖霊によって神の子とされることを主眼とする。「神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです」と十四節にあり、「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくださいます」と十六節にある。人類はことごとく神の子であるとはよく聞くところのことである。しかしながらパウロによれば、ある特別な状態にある者のみが神の子である。それは人類の全部ではなくしてその一部分である。すなわち、キリストを信じて罪と死とより免れる特別な恵みに接した者のみが、神の子である。この恵みと幸福とに接しない者は、それがいかなる聖者哲人であっても決して神の子ではない。それはただ人の子——人間である。神の子とは普通の人より一転して全く別のある他の者となった者をいうのである。

第四段は跡継ぎであることを説く。「子どもであるなら、相続人でもあります」と十七節に言う。神の子である者はまた跡継ぎとなるに至るというのである。ただ神の子という名称と資格を得たというのみにとどまらない。ある実物を付与されるというのである。神の子とされた者は神の子としてとどまる以上は、必ずある実物を神より与えられるのである。すなわち「神の相続人、キリストと共同の相続人」である。それでは何を父より譲り与えられるのか。答えて言う。改造された宇宙——全世界万物——を与えられるのであると。別の言葉をもって言えば、全宇宙とともに救われてその宇宙の主人公となるのである。実に壮大な希望ではないか。これ実に神の子

である者がキリストとともに跡取りとなって受けようとするものである。ここに至ってパウロの信仰、思想、希望は絶頂に達したのである。キリスト者は復活して栄光をまとって改造完成された全宇宙の主人公となると言う、これがキリスト者を待つ最大の栄誉また救いの完成である。ああ、偉大な思想よ、人類の抱き得る思想にしてこれ以上に出ることは到底できないのである。

ここに至って第五段の壮麗なる賛美の歌は自然とパウロの唇をついて流れ出たのである。流れ出ざるを得なかったのである。これは決して作った詩ではない。大希望、大感謝のあふれ漂う心より自然と流れ下りた大歓喜の滴りである。

以上が第八章の大意であるが、ここにさらに注意すべきことが一つある。それは七章以前の全部と第八章との相違点である。七章までにおいても勿論救いは説かれているが、これを八章のそれと比較すると大体において外部的と言わねばならない。勿論救いのことであるからこれを霊魂に受ける点より言えば内部的であるが、しかし八章のより内部的であることに比べれば、より外部的と見ねばならない。すなわち七章までに説かれる救いは主に人の外にあることを信じるのである。すなわち十字架におけるイエスの贖いを信じるのである。またイエスを仰ぎ見てそれを型としてきよめられるのである。その他いずれの点より見るも信者の外においてあることを信受するというのである。これにて救いは全うされるであろうか。否、さらにより内部的な一事が必要である。神ご自身が聖霊として私たちのうちにおりて、私たちの霊と合体し、もって私たちを助け私たちの救いを完成し給うこと、このことが是非ともなければならない。これ内部からの救いであって、実に第八章の主題である。神は内

外より私たちを救い給うのである。外に神の御業を示して私たちを救うこと―これ第七章までの主題である。内に聖霊を働かせて私たちの救いを完成すること―これ第八章の主題である。

パウロはガラテヤ人への手紙三章一節において、「ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか」と言った。十字架のイエスを明確に目の前に示されること、このことによって人は自己の罪の赦免を悟って魂の平安を得るのである。義でないのに義とされることを学んで歓喜の人となるのである。また彼はコリント人への手紙第二三章十八節において、「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊である主の働きによるのです」と言った。これは自己の外にある主の栄光を常に仰ぎ見ることによって、自己もまたそれに似るというのである。義とされるということ、きよめられるということ、これは共に重要なことであるが、自己以外の何か、ある事がその主要素となっているのである。ゆえに、比較してみれば外側のことである。これが羅馬書において七章までに説かれたことである。

このように始まった救いは内部的に完成されねばならない。聖霊が内より信者を変えねばならない。これ八章の特に教えるところである。その十六節に「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくださいます」と言い、また二十六節に「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです」とあるように、共にこの章の特色を示す言葉である。聖霊が信者の心を占領して内部

より彼を動かし、励まし、教え、力づけ、もって外からの関係を内的に完成、成就するというのである。なお他の言葉をもって言えば、七章までは神と人の関係を説き、八章は神と人の合一を説いたものである。関係は関係だけに止まっては未完成である。この関係の発達するところ、ついに合一、一致、融合にまで至らねばならない。そしてこの合一は実に霊と霊の合一をもって起こらねばならない。まず霊と霊が合一すれば相互の最も深いところにおいて合一したのであるから、その他の合一も当然実現されるのである。知識や感情の合一もまたこれに伴うのである。そして神の霊はキリストの霊である。また聖霊である。この聖霊が信者の心に臨んでその霊と一致融合するとき、いわゆる神人合一は実現されるのである。これを説いたものが第八章である